

## 正量部の煩惱説

——『有為無為決択』第21章「聖諦決択」より見て——

並 川 孝 儀

『有為無為決択』(以下、SAV)とは、チベット訳にのみ現存する *Daśabala-śrimitra* 作 'dus byas dang 'dus ma byas rnam par nges pa (*Saṃskṛtāsaṃskṛta-viniścaya*)<sup>1)</sup> を言うが、ここには相当量の正量部説(SAV第16章～第21章)が紹介され、その点からSAVは今日まで未知であった正量部の諸説—煩惱論、業論、聖諦論—を知る手掛かりとなる重要な文献と言える。

本小論では、正量部の煩惱説を眺めるが、それに関してSAVには第16章「非随眠決択」と第17章「随眠決択」で各論的に詳述されている<sup>2)</sup>ものの、その全体像は示されておらず、正量部の煩惱説の全体像を知るには第21章「聖諦決択」に説かれている記述によらなければならない。

そこで、「聖諦決択」に説かれる煩惱説を眺めるが、その記述は本章の冒頭部分と末尾に見出せる。前者は、種々の生存のあり方とその苦がどのような次第によって生起するものか、そしてそこからどのように解脱するのかを説き始めるところに見られる。その部分の訳を示すと、次の如くである。

〔和訳Ⅰ〕「〔また、説かれる。〕

貪など〔の〕この過失(skyon)によって業があり、このことから後有(yang srid)があるのである。〔そして〕後有〔の〕業が生じるのである。それから老・死が生じ、それから苦悩などが〔生じ〕、また過失(nyes)が生じるであろう。それ故に、そのようにして輪廻の前際(sngon gyi mtha')が存在しないのである。

と、説かれている。

この意味は、この場合衆生の煩惱から生じる業が福と非福と不動〔業〕であり、それによって〔業が〕生じるということなのである。その業の異熟から自他の悩み〔の〕業が生じることと、冷たさや風などの界から生じる楽と苦と不楽・不苦〔の〕受を享受することが、無明(ma rig pa)の自在によって楽による諸々の愚惑(kun tu rmongs pa)〔と〕、楽と和合する(phrad par)貪愛(sred pa)と、楽を離れない(mi 'bral bar)貪愛とを生じるのである。同様に、苦による諸々の愚惑〔と〕、苦を離れる貪愛と、苦と

和合しない貪愛とを生じるのである。同様に、不苦・不樂の受による諸々の愚惑〔と〕有(srid pa)の貪愛を生じるのである。それから、諸々の見(lta ba)と諸々の疑(the tshom)が生じるのである。それから、また業が〔生じるのである〕。それから、生存(skye ba)と〔それに伴う〕苦が生じることとなるのである。

その様に、無明の障(sgrib pa)の原因と貪愛との結合(sbyor bar byed pa)から諸々の衆生は、六〔種〕の桶の器具(zo ba drug gi 'khrul 'khor)に入るのであり、輪廻とは前際がないものである。即ち、〔六種の生存とその苦は〕地獄で焼かれ、断ぜられることなどを受ける苦と、餓鬼における飢えと渴きの苦と、畜生における厭離(skyo ba)の苦と、阿修羅における慢の苦と、人々における尋求(tshol ba)の苦と、諸天〔における〕老と死の苦は享受することである。

どのようにして煩惱から〔地獄などの生存が〕生じるのであろうか。業から生存が〔生じるので〕ある。生存から苦が〔生じるので〕ある。それから、また煩惱から生存が生じるのである。それ故に、このように輪廻の原因の根本(gtso bo)は煩惱である。

煩惱の種子(sa bon)となったものが随眠(bag la nyal)である。随眠がなくなれば、業と〔それによって得た〕生存を断ちつつ、苦から解脱するものとなるのである。」

(D. 225b2~226a3, P. 154b8~155b3)

ここに説かれる内容は、先ず煩惱から生じる業によって各種の生存が生じ、それから苦が生起するといった煩惱から苦に至る連鎖を述べ、そしてその煩惱こそが輪廻の原因の根本となるもので、更に言えばその煩惱の種子が随眠である故に、輪廻の根本となる随眠がなくなれば業とそれによって得た生存を断ち、苦から解脱することになる、と述べている。この記述の主旨は、『俱舍論』の第5章「随眠品」の冒頭に見られる「世の〔在り方の〕多様性(loka-vaicitrya)は業から生じる、と〔既に〕説かれた。それらの業は随眠によって成長する(upacayaṃ gacchanti)する。また随眠がなければ、〔それらの業は〕生存(bhava)を生じることができない。それ故に、一随眠は生存の根本である—と知られるべきである。」<sup>3)</sup>とほぼ同様である。この正量部の説の中、特に注意すべき点は「随眠は煩惱の種子」と規定されていることである。この随眠については〔和訳Ⅱ〕で更に詳述されているので、そこで纏めて論じることとする。

そこで、次に「聖諦決択」の末尾に説示された煩惱説を見るが、そこには正量部の煩惱説の主たる見解が示されており、極めて重要な記述である。その部分の訳を示すと、以下の如くである。

〔和訳Ⅱ〕「ここで総説すると、煩惱は二種である。即ち、随眠と非随眠(bag la nyal

ma yin pa) である。この中、随眠は何であるのか、非随眠は何であるのか、と言え  
ば、〔それについて〕説こう。湿った布の汗の如くに、これら随眠は三界において大  
変堅固に随沈し (rjes su thim), 相関すること ('brel par 'gyur ba) によって随眠  
と説くのである。

また〔説かれる〕。

三界において随眠し、相関する故に随眠と説く。

と、説かれている。

非随眠は煩惱性 (nyon mongs pa nyid) であり、纏 (kun nas dkris pa) のみであ  
ることによって、その如くに随眠ではないのである。その故に、非随眠と言われるので  
ある。随眠は、また何の故に〔随眠であるのかと言え、〕その如くに随眠りつつ、  
有漏法の生起 (skye ba) と住すること (gnas pa) と増長 ('phel ba) の因である故で  
ある。

そこで、その〔随眠〕は二種である。即ち次の如くである。心相応と心不相応であ  
る。

また〔説かれる〕。

その〔随眠〕は、心相応と〔心〕不相応であると知られるべきである。

と、説かれている。

それでは、心相応〔と心不相応〕の意味は何であるのかと言え、〔それについて〕  
説こう。

即ち、例えば蟻塚の住処の地面は、堅固であり、取り除きにくく、蟻の自らの住処の  
高い塚〔部分〕の基礎である。そのように、有情の不相応の随眠は、堅固であり、取り  
除きにくく、過失 (nyes pa) を生じる種子となったものである。そのことによって、  
染汚 (nyon mongs pa can) を断じない心も、悶絶 (brgyal ba) と深く眠り (gnyid)  
込むことも、無心なる睡眠によって沈むことも、無想定 ('du shes med pa'i snyoms  
par 'jug pa) に入ることも、無想天 ('du shes med pa'i sems can) 〔に入ること〕も、  
滅想定 ('du shes dang tshor ba 'gog pa'i snyoms par ['jug pa]) に入ることも、  
それらは不相応の随眠と伴うものである、と説かれるのである。

〔また、〕例えば蟻塚の高い部分は、堅固ではなく、取り除き易く、自らの住処〔の地  
面〕から作り上げたものである。その如くに相応する随眠、或いは他の煩惱、或いは随  
煩惱 (nye ba'i nyon mongs pa) などは、〔順次に〕堅固でないものの上に積み重ね上  
げられているだけで、取り除き易く、自らの依りどころと理解される種子となったもの  
と知られるべきである。

また「説かれる」。

不相応であることが「上部を」取り除いた地面を意味することは、「あたかも」蟻塚の基部の如くである、と認める。

と、説かれている。

〔また〕同様に、「説かれる」。

相応するものは、現起するもの (kun tu spyod pa) のみであり、「それはあたかも」住处となす蟻塚全体の如くである。

と、説かれている。

もし、そのように不相応の随眠が常に存在するものならば、どうして纏は常に生じないのかと言えば、「それについて」説こう。即ち、煩惱の因は三である。即ち次の如くである。境 (yul) と有境 (yul can) が合すること、不相応の随眠が「染汚を」断じないこと、非理なるもの (tshul bzhin ma yin pa) が意において作用することである。この理由で、この三〔種〕が煩惱の因のすべてである。〔これら〕諸因の群が暫時であることによって、纏はすべての時に生じることはないのである。

また「説かれる」。

境は有境によって得られることと、不相応の随眠が「染汚を」保持することと、非理なるものが意において作用すること、「この」三〔種〕が煩惱の因である。

と、説かれている。

もし、聖道 ('phags pa'i lam)、或いは外道 (phyi rol gyi lam) によって、どうして相応を断じ、不相応を断じるのかと言うならば、「それについて」説こう。即ち、不相応を断じることは、即ち「不相応が」相応の種子の住处であることと、成就し難いことの故に、そして大変堅固なる故にである。それらを断じることから相応性 (mtshungs par ldan pa nyid) を断じるのである。〔それは、あたかも〕種子が減することから芽〔が出る〕如くである。』

(D. 240a7~241a4, P. 173b6~174b6)

この記述から、先ず煩惱は随眠と非随眠の二種に分けられ、その中随眠は心相応と心不相応に区分されていることが知れる。随眠は「三界において大変堅固に随沈し (rjes su thim)、相関すること ('brel par 'gyur ba)」により随眠であると語義解釈<sup>4)</sup>され、更に「有漏法の生起 (skye ba) と住すること (gnas pa) と増長 ('phel ba) の因」の故に随眠であると規定される。非随眠は「煩惱性 (nyon mongs pa nyid) であり、纏 (kun nas dkris pa) のみである。」と定義される。この随眠、非随眠がいかなる法であるかについては、SAV 第 16, 17 章に説示されてお

り、それをここに示すと以下の如くである。

随眠（10法）：貪、瞋、慢、無明、邪見、有身見（rang lus la lta ba）、辺見、見取、戒禁取、疑

非随眠（21法）：不信、無慚、誑、諂、不察（ma brtags pa or gzu lums）、掉挙、放逸、惛沈、下劣（zhum pa or bying ba）、無愧、大執（ches 'dz-in pa）、瞢瞢（snyoms las or le lo）、睡眠、嫉、惡作、覆、憍、慳、不忍（mi bzod pa）、恨、食不調性（zas kyi rgyags pa）

随眠は心相応と心不相応に分類され規定されるが、その際の説明は蟻塚の例えをもってなされる。即ち、不相応の随眠は蟻塚の地面の如く、「堅固であり、取り除きにくく、過失（nyes pa）を生じる種子となったもの」と規定される。一方、相応の随眠は蟻塚の地上に出た部分の如く、「堅固でないものの上に〔順次に〕積み重ね上げられているだけで、取り除き易く、自らの依りどころと理解される種子となったもの」と、また「現起するもの（kun tu spyod pa）のみ」と規定される。そして、不相応の随眠が常に存在するのに対して、纏はどうして常に生じないのかについては、三種の煩惱の因をもって説明する。即ち、境と有境が合すること、不相応の随眠が〔染汚を〕断じないこと、非理なるものが意において作用すること（非理作意）の三種の因が暫時である故に、纏はあらゆる時に生じることはない、とするのである。

以上がSAV第21章に見られる正量部の煩惱説であるが、これより有部、犢子部などの他部派の説と少し比較し、注意しなければならない点を以下にまとめてみたい。

（1）「随眠は煩惱の種子」との規定から、煩惱と随眠は有部の如く同一視されず、区別されており、また非随眠を纏とすることから纏とも区別されている。この規定は随眠を纏とする毘婆沙師説、得（prāpti）とする犢子部説、そして種子とする経量部説<sup>6)</sup>と比較すると、同系の部派である犢子部と異なり、経量部説と同じようである。しかし犢子部の、随眠は煩惱の種子という意味を有するもの、との資料<sup>6)</sup>と比較する時、これは正量部の規定と一致する。

（2）煩惱は随眠と非随眠に分けられ、「非随眠は煩惱性で、纏のみで、随眠しない」と規定されるが、これから随眠とは煩惱が現行していない睡れる状態を言い、非随眠とは纏で煩惱が現行している覚めた状態を示唆しているかのようで、この点からは経量部説と類似しているようである。

（3）『俱舍論』第5章「随眠品」の始めに、欲貪随眠（kāmarāgānuśaya）は持業

釈か依主釈かの解釈に関連して、随眠の心相応・心不相応説が論じられる。有部は心相応のみとし、経量部は心相応でも心不相応でもないとし、犢子部は心不相応説を執るとされる<sup>7)</sup>。この犢子部は、心を染悩するものすべては随眠ではなく、煩惱、即ち纏によってなされるものと考え、そしてその纏は常に現前しているものではない、という見解を有するものとされる<sup>8)</sup>。この犢子部の見解は、心相応を認めたかどうか、或いは非随眠という術語が使用されていない点などから、正量部説と少し相違があるようであるが、随眠の心不相応を認める点から基本的には同じ見解に立つものと言える。

(4) 随眠の心不相応は「染汚を断じない心、悶絶と深く眠り込むこと、無心なる睡眠によって沈むこと、無想定に入ること、無想天に入ること、滅想受定に入することを伴る」と規定される。この悶絶以下の規定は、『唯識三十頌』に意識は他の五識が機能する時、常に伴い生じるものであるが、例外として伴い生じない場合がある、とする<sup>9)</sup> 内容と一致する。

以上、SAV第21章「聖諦決択」に説かれる正量部の煩惱説を概観した。尚、紙面の都合により詳細は別稿で論じる予定である。

- 1) デルゲ版：(東京大学文学部所蔵版) No. 3897, 55-1-1(Ha109a1)～159-1-7(317a7), (台湾版) No. 3902, 324-3-5(409)～334-5-5(481), 北京版：TTP. No. 5865, 4-3-1(Nō5b1)～110-3-3(270b3)
- 2) 拙稿「正量部の随眠説—Saṃskṛtāsaṃskṛta-viniścaya第17章—」『佛教大学研究紀要』71号 pp. 1-18, 拙稿「正量部の非随眠説—Saṃskṛtāsaṃskṛta-viniścaya第16章—」『佛教大学研究紀要』74号 pp. 1-26, 宮崎啓作「Stobs-bcu dpal bśes-gñenの正量部の随眠」『印仏研』29-1 pp. 20-21
- 3) Abhidharmakośabhāṣya(ABh), by P. Pradhan p. 277 11. 3-4
- 4) 随眠の語義に関しては、三友健容「Anuśayaの語義とその解釈」『印仏研』23-2, pp. (110)-(115)など参照。
- 5) Abhidharmakośavyākhyā(AKV), by U. Wogihara p. 442 11. 28-29.
- 6) ABh. p. 278 1. 22-p. 279 1. 1.
- 7) ABh. p. 277 1. 15-p. 279 1. 4.
- 8) ABh. p. 278 11. 16-17, AKV. p. 444 11. 3-6
- 9) Vijnaptimātratāsiddhi-viṃśatikā et trimśikā, par S. Lévi p. 34 1. 11- p. 35 1. 4, 『唯識三十論頌』大正蔵31巻, 60・c

〈キーワード〉 正量部, 煩惱説, 随眠, 非随眠, 有為無為決択 (Saṃskṛtāsaṃskṛta-viniścaya) (佛教大学助教授)